

カラスのきょうだい
たちが
やってきた！



私が育てたカラスの赤ちゃん
Ⅱ

石下郁子

目 次

1. カラスの子どもたちの訓練（8話）
2. 音楽会のそのあとで（9話）
3. カラスのきょうだいたちがやってきた（10話）
4. カーちゃん、飛べるようにはなったけど（11話）
5. 鳥獣保護委員さんの話（12話）
6. 嵐の夜（13話）

カーちゃんを畑に連れて行った最初のころは、何処かに飛んで行ってしまったらどうしよう、という心配ばかりしていました。しかし回を重ねるごとに、もしそうなったら、それは人間の力を借りずに生きていけるということなのだと考えられるようになりました。

しかしどこかに飛んでいくような様子はありません。カーちゃんは途中つまづいたりしながらもスキップ歩きで、あちこち散策しているのです。思わず手をとめてその姿を眺めてしまいました。

ただそうしていてどこかの茂みにでも入ってしまったらという心配はしていましたが、それで時々名前を呼び、ガアという声を確かめながら、畑の草取りなどをしていました。

だんだん体力もついてきて、少しは飛び上がれるようになったのもうれしいことでした。それで畑に行けない日や、日中家にいて私の手の空いた時などは、ベランダや物置の屋根の上に寄せたりして遊ばせるようになりました。

鳥かごが狭くなって1日中そこに閉じ込めておくのがかわいそうだったからです。

このころ近くの音楽教室で、震災のために音楽家のご夫妻主催によるチャリティ コンサートの誘いを受けました。

カラスのことが心配で、とても家を空けられる気分ではなかったのですが、近所でもあり、短時間ならばと出かけることになりました。

コンサート当日、外出する30分くらい前にカーちゃんを物置の屋根の上に寄せ様子を見ていましたが、洗濯物を取り込むことを思い立ち、玄関から2階ベランダに上がり洗濯物を取り込みました。

ベランダと物置はすぐ近くなので、カーちゃんは物置から東側の1階のひさし屋根の上に移って、洗濯物を取り込む私を見ていました。

間もなく全部の用意を終えて、カーちゃんを鳥かごに戻そうと物置の方に行きました。するとカーちゃんはもうそこにはいないで、北側の屋根の方に回っています。

物置の屋根からベランダは近いのですが、ベランダには仕切りがあって簡単には中に入れないし、南側には進めないで、北側に回ったようなのです。

どうしよう、と一瞬思いました。もう出かける時間が迫っています。

短時間で屋根に上って連れ戻すことはできそうにありません。それでやむなく屋根の上のカーちゃんに見送られるような形で家を出ました。大丈夫だ、と思うことにしました。

小さなチャリティコンサート。

ご夫妻のうち、奥様がピアノ演奏されたのはブラームスとリストです。あと、作曲をなさるといご主人の曲をやはり奥様が演奏されました。

そのあとケーキと飲み物と楽しいおしゃべり。そして帰ってきました。

その場所まで、歩いて5分ほどの距離です。

心せく思いで家の近くまで来たとき、家の斜め前方にある大型電器店の屋上を見て、目を見張りました。

そこに数羽のカラスがいて、その内の何羽かは体が小さい、明らかに子どものカラスだったのです。

子どものカラスが屋上の淵から下に向かって次々に飛び降りている様子、はっとしました。しかし子どもたちはほんのわずかを飛ぶだけで、すぐに屋上に戻って行きます。傍にいてそれを教えているのは2羽の親ガラスです。

子どもたちは代わる代わる、そして何度も何度も飛び降りてはまた上り、を繰り返しています。そして少しずつその幅を広げて行っているのも見て取れます。

それは心温まる光景でした。

あの子どものカラスはうちのカーちゃんよりも小さいようだ、離れているにしても、はっきりとそう感じられるほど、それは小さなカラスでした。

その子どもたちに親は今、これから生きていくために身に付けなければならない大切なことを教えている。子どもたちはそれを命がけで学んでいる。胸が熱くなるような、親と子の強いつながりを感じました。

そして不安になりました。

屋根の上のカーちゃんはあれからどうなったのか、どうか無事でいて！ もう、そばまで来ているから、そんな祈るような気持で家に帰ったのでした。

音楽会のそのあとで

チャリティコンサートのあと胸騒ぎを覚えて家に戻りましたが、やはりもとの屋根の上にカーちゃんの姿はありませんでした。

私家が留守にしたのは2間弱その間一つ所にいるとは思えませんでした、そう遠くに行ったとも考えられません。

猫に襲われる危険はあっても、周りが見渡せる屋根の上ではたとえ襲われても、身をかわせるだけの体力はついていると思いました。荷物を家に置いて外に出て「カーちゃん、カーちゃん」と名前を呼んで捜しました。

ちょうど通りがかった近所の人、少し前、北側の家の屋根の上で鳴いていたと教えてくれました。でも今はもうそこにはいません。

では飛べたのだ、と私は思いました。

我が家と北側の家の間にはそう広くはないけれど庭があります。少しは飛べるようにはなったとはいえ、屋根から屋根まで飛び移れるとは思ってもみませんでした。

驚きましたが、すぐにその間には樹木や電線などがあることに気が付きました。カーちゃんは一気には飛べなくても、何回かに分けてその屋根に飛び移ったのでしょうか。

カーちゃんはそこで猫に襲われてしまったのか、それともどこか遠くへ飛んで行ってしまったのか。

そんなことを考えていると、私の声を聞きつけたのか、どこかで鳴いているカーちゃんの声がしました。

道路沿いに家の周辺を捜すと、さっきいたという家の隣、私の家からは斜めの北西に当たる家の2階の屋根の上にカーちゃんはいました。しかし下から名前を呼んでも、いつもならすぐ飛んできて、私の肩に止まるはずのカーちゃんが、この時はなぜか近寄ってきません。

つい2時間ほどの間にすっかり別のカラスのようになっています。

私はあきらめずに名前を呼び、用意した餌も見せましたが、カーちゃんは下に下りて来ようとせず、ただ頼りなくガアガア鳴いているだけです。そしてそこからまた数メートル飛んで電線を経由し別の家の屋根に飛び移りました。

その時どこからか、2羽の親ガラスが大声で鳴きながら飛んできて、狂ったように上空を旋回し始めました。

カーちゃんはどうもそれが怖いらしく一つ所に固まったように動かなくなり、鳴くこともしなくなりました。しばらくして親がいなくなるとまた少し飛んで移動しますが、下まで降りてこようとはしません。

親ガラスが再び飛んでくるとカーちゃんの動きも止まります。

私は鳥かごと餌を持って名前を呼びながら移動するカーちゃんを追ってその周辺を歩きました。カーちゃんはだんだん家の近くに帰ってきました。

「カラスですか」

行ったり来たりしている私に一人の女性が声をかけてきました。どうもさっきから見ていたら

しいのです。笑われちゃいますよね、こんなことしてて」と言うと、

「いいえ、私もカラス好きなんです」と言って、こんなことを話してくれました。

「カラスって、とても頭がいいですよ。息子が小学生のころ、学校から走って帰ってきたらしく、玄関に飛び込むなり『お母さん、表にカラスいるかどうか見て』っていうんです。玄関を開けてみるとそこに大きなカラスが座っているんでびっくりして『いるよ、どうしたの?』って聞いたら、カラスに石ぶっつけたっていうんですね。それでカラスが後を追いかけて来たんで、走って逃げて来たらしいんです。本当に馬鹿なことしたって叱ったんですよ。カラスは人の顔覚えているからまた襲われちゃいますよね」

「で、どうしたんですか、そのあと」

「家にちょうどピーナッツがあったんです。それ持って行って、カラスのそばにしゃがんで『ごめんねー、ごめんねー』って謝りながらピーナッツを上げたんです。ポリポリ音立てて全部食べて、帰っていきました」

お母さんの謝罪を受け入れたらしいカラスは、翌日以降息子さんを追いかけることはしなかったそうです。

カーちゃんをよその家の屋根に見ながら、私たちはそのあとも長い時間話し込みました。

何故そんな話になったのかわかりませんが、その人は突然、ご自分の家庭のことを話し出しました。特に今は成人した娘さんや息子さんのこと。

「いいんですか、そんなこと、私がお聞きしちゃって」と私は言いましたが、その人は淡々と話されました。とても他言はできないようなことです。

その後、近くに住みながら会うこともなかったその人に数カ月ぶりで家の前で会いました。

「ご近所なのにお会いしませんでしたね」というと、以前自転車に乗っている私を見かけたが、気が付かないようだったと言われました。

畑の方から来たというので、「私、空見て自転車乗ってたんでしょ。きっと、カラスのこと考えてたんです。カラスのことで頭いっぱいだったから」

私はその後のカラスのことをその人に話し、子供さんたちのことを聞きました。状況は変わらないけど自分の気持ちが変わって楽になりました」と明るく話されていました。

人には、長い年月を経ても完全には消化しきれない心の傷というものがあるものです。その人の抱えていた問題はそれほど大きなものでした。私はほっとし、これもカーちゃんが繋いでくれたかかわりだと強く思いました。

さて、よその家の屋根にいる我がカーちゃんの話でした。

大分日が暮れてきたころ、カーちゃんは少しずつ我が家の方に近づいてきました。そしてとうとう庭の横に渡された電線のところまで来ました。

カラスのきょうだいたちがやってきた

名前を呼ばれても何の反応も示さなかったカーちゃんでしたが、自分の帰るところはここだと分かっていたのだ、と家に近づいてきたカーちゃんを見て安心しました。

しばらく前から姿を見せなくなった親ガラスは、子どもをあきらめたのか、そんなふうに思い始めた時、小さなカラスが4羽さっきの電器店の方角から一斉に飛んできて、カーちゃんを取り囲みました。

3羽はひとかたまりになってこちら側の電柱に、もう一羽はカーちゃんの向こう側の電線に止まっています。ちょうど熊手のような感じに並んでいます。

それはさっき電器店の屋上でヨーヨーのようになって下降練習をしていた、あのカラスの子どもたちでした。

やっぱりあれはカーちゃんのきょうだいだったのです。身体はカーちゃんよりふた回りも小さい感じですが元気なカラスたちでした。

私はその時気が付きました。親鳥はこうして互いにきょうだいを引き合わせたのです。

今まで2階のベランダから電器店の方角を見たことはたびたびありましたが、そこにカラスの子どもを見たようなことは1度もありませんでした。だいたいカラスの子どもを見たのもカーちゃんが初めてでした。

親ガラスはこの日、はぐれてしまった子どもが久しぶりに屋根の上にいるのを見たのです。それでひそかにきょうだいたちを引き合わせることを考えました。それで電器店の屋上にきょうだいたちを連れてきたのです。

そしてはぐれてしまった子どもが、きょうだいを見てまた自分たちのところに戻ってくるのを願ったのでしょうか。親は忍耐強くそれを待ちました。ところがそこにまたしても人間、私が姿を見せたのであんなにも騒いでいたのです。

そして今、親はきょうだいたちをカーちゃんのところによこしました。当の親はどこにいるのか姿を見せず、子どもたちもひと声も発せず電線に止まっています。

このまま仲間の所に帰ってくれたらどんなに安心なことだろう、一抹の寂しさの中で私はそう思いました。

カラスを飼うことができないことを知っていたからです。

しかしきょうだいに囲まれたカーちゃんはさっきと同じように、身動き一つしません。

近所の人たちも初めて見る光景に驚いて周りに集まってきました。

しばらくして姿を見せない親から何らかの指示があったものか、4羽の子どものカラスはいっせいに北西の方角に飛んで行ってしまいました。

カーちゃんがなぜ、私の呼ぶ声にも飛んでこなかったか、それは後でわかりましたが、鳥の子どもは上には飛んで行けても下降することは難しく、危険が伴うことだったのです。

さっき電器店の屋上で、ほかの子どもたちは親からそれを教わっていましたが、カーちゃんはそれを誰からも教えてもらうことができません。

その後カーちゃんは家の玄関横にあるヤマモモの木までたどり着きました。そのてっぺんの場所を自分のねぐらに決めたらしく、下から電灯で照らしながらいくら呼んでも下りてきませんでした。

保護する前も、幾晩かは危険な夜を生き延びたのだ、きっと大丈夫だと思うことにして夜10時ごろあきらめて家の中に入りました。

ところが夜中の2時ごろ、激しい雨音に目を覚ましました。

カーちゃんはちゃんと葉っぱの下にいるだろうか、

心配になり電燈の光を当ててみると、全くの無防備で雨に打たれています。

ヤマモモの木は、夫が少し前に枝を下ろしたばかりで、雨をよける場所はないはずとと思っていましたがその通りでした。

それでもどこかで雨をよけてくれればという期待もむなしく、カーちゃんは身を守るための何の工夫もせず、ただ仏像のように枝に止まったまま、大雨に打たれているのでした。このままではカーちゃんは豪雨に打たれて死んでしまうと思いました。それで木に登ってカーちゃんを助け出す決心をしました。

まず身づくろい、パジャマの上に上下合羽を着て懐中電灯を首に吊るして、木に梯子をかけて2メートル半くらい登りました。そこで抵抗するカーちゃんを捕まえ合羽の中に抱え込んで、下に下りました。

本当は袋に押し込めて下りると手が使えて楽だったのですが、抵抗されてできませんでした。火事場の馬鹿力とはいえ、自分の木のぼりの才能に我ながら感心しました。

あーあ、早くこうすればよかった、もうくたくたよ、カーちゃんのおかげで、と文句を言いました。

それからカーちゃんを鳥かごに入れ、二人とも安心して朝まで休みました。

そうそう、夫の夕ご飯は〇〇〇の牛丼でした。

それでいいよと言ったものですから。私は食欲なく食べませんでした。

カーちゃん、飛べるようにはなったけど

音楽会のあった日に、屋根の上に置き去りされたカーちゃんが、いくらかの距離なら飛べることを知った時から、新しい問題が持ち上がりました。

1日の内のほとんどの時間を狭いケージの中で過ごしますが、家の中で運動をさせるようなこともあります。しかしその日を境に、カーちゃんは家の中でも『飛ぶ』ようになってしまったのです。リビングのソファからテーブルの上に飛び乗ったり、リビングから台所までの距離を羽を広げて飛んだりします。

床を歩くだけならまだしも食べ物や食器がある台所周辺を飛び回られるのは困ります。それで玄関に木の枝をおいて止まり木を作り、食べ物のある部屋にはカーちゃんを入れないようにしました。またなるべく外に出して運動をさせるようにしました。

最初のころ、カーちゃんは物置の屋根やベランダや藤棚の周辺を飛び回っていました。

プラスチックの器に飲み水を入れそばに置いておくと、無理にその中に入ろうとします。それでもっと大きな器に水を入れてやると、カーちゃんはその中でおなかや羽をぬらし、バシャバシャと全身を洗っています。

親を忘れているのですから、親から教えてもらったことをしているわけではなく、これは本能なのだと思います。このころ暑い毎日が続いていたのです。

それからカーちゃんの行水は毎日の習慣になりました。猫が来ていつの間にか大きくなったカラスを不思議そうに見ていますが、そばに人がいる限り、もう飛びかかろうとはしなくなりました。

鳥かごに入れてカーちゃんを庭のあちこちを移動させていたのは最初のころと同じです。

朝のうちは、デッキの向こうに据えてある物干し台の竿に吊るしました。そこはある時間まで育ちの早い月桂樹が枝を広げ木陰を作ってくれます。

昼近くになるとベランダの真下で、そのころちょうど日がかげりる和室前に吊るしますが、そこはエアコンの吹き出し口に当たるため、かわいそうで、2階ベランダの陽がかげるとすぐベランダに連れて行きます。

猫の襲撃に対して一番安全なのは、2階のベランダの物干しぎおに吊るすことでした。

鳥かごや竿にかかる負荷を考え吊るすのはなかなかの重労働でした。

2階のベランダに吊るすと、待っていたように親鳥が鳴きながら周辺を飛び始めます。これもまた最初のころと同じです。こうしたことで体調を崩したのか、私は間もなく耳下腺を腫らし10年ほど前患ったはずの帯状疱疹になってしまいました。

痛くて髪の毛を梳かせなくなったのが始まり。

その痛みには覚えがありました。あ、この痛みなんだっだろう、と考えすぐに気が付きました。私には帯状疱疹の菌が残っているらしく疲れがたまるといつもこの症状が出ました。

少し前、ひどい風邪をひいていてそれ以降体調が回復していなかったのかもしれませんが。右頭部から顔面にかけて真っ赤に腫れ上がり、病院通いをするようになってしまいました。

そんなある日、カラスがお隣、最初猫を追って下さいと言ってきたお宅のベランダに行っていました。

すぐに呼び戻しましたがベランダには洗濯物も干してあります。きっと汚したに違いないと思ってお詫びに行きました。

そのお宅の前で、以前「カラスの恩返しがありますよ」と言っていたご近所のご主人に会いました。

私が体調を崩しているのを見て、

「あのカラスは元気にはなれないかもしれませんよ。どこか引き取って面倒を見てくれるところがあるかもしれないから、調べてみられるといいですよ」と言われました。

私が半信半疑でいるとお隣の奥さんが、「調べてみましょうか」と言ってくれました。

幾分の抵抗を感じながらも私はそれをあいまいな形で「お願い」してしまいました。

これが間違いのもとでした。すべて自分でやるべきでした。

昼ごろお隣の奥さんが来て、「カラスは家で飼うことはできない鳥だそうです。今日、鳥獣保護委員の人が引き取りに来て、カラスを安全なところに放すそうです」と言われました。

ああ、そのことなら知っていたんです。知っていながら……

私は自分のあいまいな態度を後悔しました。そして次の言葉が出ないほど激しい衝撃を受けました。

自分の意識のどこかにこうなることを予測していたという部分があります。それほど人がいいというわけでもないのに、私には相手が何か強い主張を持っているようなとき、それでもいいか、とってしまうあいまいさがあります。波風を立てるのが嫌なのです。

あとで鳥獣保護委員さんから聞きましたが、県の自然環境、害鳥対策のようなところに電話が行って、私のしている行為は問題行動ということになってしまったようでした。『通報』という形になってしまったのです。

音楽会のあと、カーちゃんがあちこちを飛び回るようになった時から、できるだけ早い時期に自然に返さなければならないという焦りを私も感じてはいました。そのために餌をやるのを控えたり、夜、鳥かごを外に吊るしたままにしたりしました。

餌やりを控えるとカーちゃんの「どうしてくれないの？」という視線を辛く感じたり、夜間も鳥かごを外に置き戸外での生活に慣れさせようとしても、人間社会の中では、昼と夜との使い分けに無理があることにも気づかされました。

軒下に吊るしても住宅街の夜はいつまでも明るく、朝は朝で早くから陽の光が差し込みます。

この対策には、洋服の裏地用の黒い布があったので、夜になるとそれで鳥かごをすっぽりくるむという方法をとりました。私自身も焦りを感じていたのです。早く一人立ちできるようにしなければ、とっていました。

このころ表にいるカーちゃんを見守っていた時、1羽のオナガがカーちゃんの行動に目を付けたことがありました。カーちゃんは屋根の上にいました。

オナガは最初カーちゃんのそばを気づかぬふうに通り過ぎましたが引き返して来て、その周りを行ったり来たりし始めました。このカラスがどんな様子かと品定めをしている様子です。私は息をのんで見ていました。

その時、私は気づきました。カーちゃんは体をピンと立て相手に自分を大きく見せていたのです。

度重なる猫の襲撃に対しては全く無防備といえるのに、同じ鳥類であるオナガにはただならない気配を感じて本能的にそうした態度を取ったのでしょう。

オナガはかなりの時間カーちゃんの様子を見ていましたが、しばらくしてどこかへ飛んで行きました。

鳥獣保護委員の人がカラスを引き取りに来るという時間は、ちょうど帯状疱疹の治療のために病院での予約が入っていました。

私ができることを言うと「預かります」と言われましたが、そんなふうには割り切れるわけもなく、自分で電話をして時間をずらしてもらおうからと伝えました。

この年の7月20日は関東地方に台風が接近していた日です。大荒れの天気予報が出ていました。そんな日にそれもこれから夜に向かうという時間に、まだ十分に飛べもしない、自分で餌

をとることもままならないカラスをとて放す気にはなれません。

しかし事態は急を要しています。

その日時間をずらしてもらった鳥獣保護委員の人は、私が病院から帰った午後5時に自宅にきました。

実はこの方とは初対面ではありません。いつか畑にアライグマが現れスイカを食べられてしまった時、罠を仕掛けてもらったことがありました。罠にはかかりませんでした。罠に驚いたらしくその直後アライグマの出没はなくなりました。

そんなふうにお世話になった鳥獣保護委員さんでしたが、私は少なくともこの日は、絶対にカーちゃんを手放すつもりはありませんでした。それで安全策のためカラスを鳥かごから出しておきました。

カーちゃんは住宅のはじの雨どい、2階からの雨受けの三角の筒の所に止まっていて一生懸命に羽づくろいをしています。（雨の日、ひさしの突き出たその雨どいの所でカーちゃんはよく遊んでいました）。

私が呼ぶたびに返事を返しますが、誰かほかの人がいると絶対そばには来ません。

「こんなふう慣れていては手放すのは辛いでしょ」とカーちゃんと私の様子を見てその人は同情してくれました。

カラスの親が子どもを恋しがって家族で姿を見せていると話すと驚いていました。そしてご自身も小学生の時、学校帰りにカラスが3羽、自分の後をついて家まで来てしまった、という話をされました。

またこれまでに何度も、傷ついた野鳥を保護しているとも言われました。

「怪我をした小鳥を保護し、その小鳥がすっかり慣れて家内のピアノに合わせてダンスをするようになったんです。元気になったので自然に返しましたがやっぱり辛かったですよ。最初のころは庭に来て声を聞かせてくれました。だんだんそれがなくなりさびしかったですが、ああ自然に帰ったんだなと思うことにしたんです」

「私もいつかはそうするつもりでした」と私は言いました。

「でもあちこち怪我をしていますし羽も抜かれています。子どもを慕って毎日飛んでくる親に何とかこの子を返してやりたいんです。それがだめなら自分の手でカラスを山に放しに行きます」と言いました。

私は本当にそう思っていました。こうなってしまった以上、2、3日天気が見込める日の朝の時間に、保護委員さんの言われる、水と高い木のある場所を探してそこに連れて行こうと。

でも親は自分の子どもを見つけられるだろうか、私とその心配を口にすると親はどんなに離れていても子供の声を聞き分けて探し出すから大丈夫ですよと保護委員さんは言います。

さらにカラスは仲間意識が強く、仮に親が子育てを放棄しても、カラス仲間がその子どもの面倒を見ると言われます。

私はいくらか安心しました。

そしてこう思いました。

（これからカーちゃんが暮らす場所は水場と高い木のある山の中）。

台風が行き過ぎたら川沿いの道を自転車で走ってみよう、そしてそんな環境が近くにあるところを探してカーちゃんを放して来よう、そのあとはときどき様子を見に行こう、そう心に決めました。

保護委員さんの話を聞いて少し心が安らいだのは、これからカーちゃんが暮らす場所をあれこれ想像できたからです。

通常嫌われ者のカラスですが、『夕焼け小焼け』や『七つの子』、『からすの赤ちゃん』など、広く童謡に歌われているのは、不気味といわれながらもカラスは頭もよく、人懐こくて見方によっては愛すべき存在だということをどこかで感じているからではないかと思います。

旧約聖書にはカラスがエリヤという預言者に食べ物を運んで養った、という嬉しい話も出てきます。

『幾羽かの鳥が、朝になると彼のところにパンと肉とを運んで来、また、夕方になるとパンと肉とを運んで来た。』

それともう一つ希望があったのは、市内の隣の町内に住む友人がごみを出す日になるとどこかから二羽のカラスが飛んで来て、集積場のそばにいるという話を聞いたことです。

それでごみ出しの日にカーちゃんをそこに連れて行き、人間は隠れていてケージをそばに置いてみようということになりました。

カラスには縄張りがあるとも聞いていましたし、そのカラスはカーちゃんの親ではないかと思ったのです。

鳥獣保護委員さんが来たのが20日の水曜日で、ごみ収集の日は金曜日です。それまでにカーちゃんをできるだけ外に慣らしてごみ収集のある2日後を待つことにしました。

鳥獣保護委員さんの来た日の夜はもう何日も前から天候が大荒れの予報が出ていて、注意警告のニュースが流れていました。ですから、カラスを連れに来ると聞いたとき、よりによってこんな日に、と思ったものでした。

カーちゃんを引き取ってからこの時ほど、つらく切ない思いをしたことはありませんでした。

その夜吹き荒れる暴風雨の中に、私はカーちゃんのケージをベランダの床に置いたままにしました。

吹き込む雨風の対策はそれなりにしました。

これまでもカーちゃんを少しでも外の生活に慣れさせようと、夜間、表に出していたことはあります。でもそれは雨や風や猫の襲撃からカーちゃんの身を守ったうえでのことでした。

私はベランダのこちら側の部屋で休みながら、カーちゃんが自分の環境の変化を理解できず「ねんねー、ねんねー」とつぶやく声をいつまでも聞いていました。

思えばカーちゃんは性格の穏やかなカラスです。むかし我が家で最初に飼っていたインコは気性が激しく、2番目に飼ったシーズー犬は従順でしたが、病気で捨てられていたことがトラウマになっていて、一人になるのを嫌い、そうされると猛烈に抵抗する犬でした。

しかしカーちゃんはまだ赤ちゃんだったこともあります。すべてされるまますを受け入れます。カーちゃんが抵抗するのは羽を触れられる時だけです。

物置の屋根や玄関に吊るされたケージの中で、外出する私を不思議そうに見送ったり、外に出ている時も呼ばれば返事をし「おいで」と声をかければ必ず飛んできます。

だからこの時も「ねんねー、ねんねー」と言いながら何の抗議もせず嵐の中で一夜を明かしたのでした。

あくる日、風は吹いていましたが、天候はおおむね回復しました。

友人の住む町内のごみ置き場に来るカラスが、カーちゃんの親ではないかという期待を持ってはいても、それがうまくいくとは限りません。別の対策もいろいろと考えておく必要があります。

カーちゃんを山に連れて行くこともいざとなると不安があります。

どこか遠くに行ってカーちゃんをかくまって飼う方法はないものか、などということも考えたりしました。

以前はカーちゃんが住める小屋を作れたら、ということばかり考えていました。ひそかに材料探しまでしていましたが、今となってはそれは許されません。手放さなければならないのは決定的です。

その日、天候が回復した昼ごろちょっとした気の緩みで、カーちゃんを玄関ポーチに置いたまま家の中に入ってしまった。

カーちゃんも大分しっかりしてきたし、このところ猫が襲うこともなくなっていたので油断してしまったのです。

間もなくギャーッという今まで聞いたこともないような叫び声を聞いて表に飛び出しました。

お隣の茶トラ猫が、人の気配を感じてカーちゃんのところから逃げるところでした。大小の3本の羽が途中まで抜かれプラプラしていました。これで確認できただけで6本の羽をカーちゃんは抜かれています。今度は私の不注意が原因でした。胸がつぶれるような思いです。

カーちゃんはこの時ウトウトしていたのです。昨夜嵐の中で眠らなかったから。

それでいつもなら猫が近づくと、ケージの中を移動して身をかわすのにそれができなかったのです。

こんなに羽を抜かれてしまって、カーちゃんは前のように飛べるだろうか、それが新たな不安になりました。

カラスのきょうだいたちがやってきた！

<http://p.booklog.jp/book/75725>

著者：石下郁子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/thmo2535/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75725>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75725>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ